

橘曙覧「独楽吟」と邵雍「首尾吟」

——漢詩受容と表現形式の形成を中心に——

王 曉瑞

はじめに

近世後末期の歌人橘曙覧の連作詠「独楽吟」は、各歌の初句を「楽しみは」と歌い出し、末句を「時（とき）」で結ぶという珍しい表現形式を持つ、いわば「楽しみ」の歌である。当時の福井藩主松平春嶽をはじめ、正岡子規などによって倣って詠じられ、多くの歌人に影響を与えたという。

「楽しみは……時（とき）」という独特の形式について、先行研究では、「くつかむり」の方式などが作者の発想と構成を促した、あるいは俳諧歌や狂歌から影響を受けているなどの指摘が存在するが、納得のいく具体的な説明ははまだ提出されていない。

前川幸雄・前川正名・水島直文の論文『橘曙覧作「日本建国之吟」考』（『福井大学教育地域科学部紀要』第52号 2001・12）に、「独楽吟」は、宋の邵雍の詩集『伊川擊壤集』中の「独楽吟」を典拠としているという橘川時雄の説が載る。しかし、邵雍（1011-1077、北宋時代の儒学者）の詩集『伊川擊壤集』には、「独楽吟」という作品が存在せず、その一方、「首尾吟」という一群の連作詩がある。

この「首尾吟」は、一百三十五の連作であり、各首詩の初句と末句は「堯夫非是愛吟詩」（堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず）という同じ句で統一されている。このような形式は『伊川擊壤集』に初見され、「首尾吟」体と呼ばれて漢詩の体裁の一つになっている。これは「独楽吟」の形式と非常に相似している。これについて発表者は、「独楽吟」の表現形式の形成において、この「首

尾吟」体という体裁からの影響を看過すべきではないと考える。

また、表現内容においても、学問の楽、日常生活の楽、自然の楽、家庭・田園の楽など人生の楽しみを詠み上げる、または静思・瞑想の境に入ったことや困苦の境に陥ったことを詠むなど、「首尾吟」から発想や趣向などをとりなしたとみられる例が「独楽吟」に散見される。

したがって本発表では、「独楽吟」にみられる曙覧の独特な表現形式について、邵雍の「首尾吟」との受容関係を考察し、その形成の様相を検討してみたい。

一、「独楽吟」とその表現形式

1、「独楽吟」について

「独楽吟」（どくらくぎん）は、曙覧の家集『志濃夫廼舎歌集』の第三集『春明草』に収める五十二首の連作歌であり、各歌の初句を「楽しみは」と歌い出し、末句を「時（とき）」で結ぶという独特な表現形式を持つ、いわば「楽しみ」の歌である。その内容は、学問、友人、家族、飲食、田園、自然風物など身近の生活から取材して、平明な用語で、日常の生活を詠みこなした庶民的な歌風を持ち、感情の自然の流露をそのまま写し、従来から各名家に賞賛された。

例えば、正岡子規は

「独楽吟」と題せる歌五十余首あり。歌としては秀逸ならねど彼の性質、生活、嗜好などを知るには最便ある歌なり。……^①

といい、斎藤茂吉は

曙覧の歌は一般に軽くて薄きものが多い。「独楽吟」の数十首もまたその数に漏れぬが、然かもなほ素朴で落著いてゐるところがあり、口調が軽く、
亘つて行かない徳分を保有してゐる。『ぜに』と云つたり『呉れし時』などの口語脈も親しくひびいて厭味に陥つてゐない。

というように評賞し^②、また、折口信夫は

曙覧の独楽吟は櫻の花のやうだ。独楽吟総体として見る時に殊に興味深く、総体中の一々として見る場合、その一首々々に曙覧の性質・人となり

がそれぞれ鮮かに彫り表されて居て微笑しくも好ましいことだ。

と絶賛した^③。

そしてまた、「独楽吟」は現代に蘇り、平成4年(1994)、福井市・(財)歴史のみえるまちづくり協会により、「平成独楽吟」という独楽吟のコンテストが開催されるようになった。以来、毎年日本全国から多数の参加応募があり、話題になっている。一等賞は「橘曙覧賞」といい、表彰式が福井市橘曙覧記念文学館で行われている。昨年度第14回の「橘曙覧賞」受賞作品は以下のようなものである。

たのしみは日だまりの中眠る子の桜色した爪を切るとき

(作者：水谷 あづさ)

(参考ページ)

<http://www.city.fukui.lg.jp/d260/rekimiti/dokuraku/dokuraku14.html>

2、「独楽吟」の表現形式について

「独楽吟」の初句を「楽しみは」と歌い出し、末句を「時(とき)」で結ぶという独特な表現形式は、当時の福井藩主松平春嶽をはじめ、正岡子規などによって倣って詠じられたのである。

松平春嶽が「このごろ、曙覧がたのしめるままにたふれ歌四十五首をかきつけて、(中略)予これにならひて五十首をよみて、西施之傲顰にちかしとひとり笑ひて、かくはしがきせるなり」というようにはしがきをつけ、「たのしめる歌」と題して、五十首を詠んだ。例をあげれば、以下のようなものである。

たのしみは早の後に雨ふりて民の嬉しといふを聞く時

たのしみは人もとひ来ず人きてもはやくかえりて文を見る時

たのしみはこころにかかる事なくてしづけき窓に文を詠む時

また、正岡子規が「独楽吟」を絶賛しながら、その形式を倣って、「足たたば」と題した一組八首の歌や「鳥にありせば(十首)」などの歌を詠みあげている。

曙覧のこのような詠歌の形式について、土岐善麿が「れいの「くつかむり」の方式などが、作者の発想と構成をうながしたものとみられる」と指摘した。（日本古典全書『宗武・曙覧歌集』『橋曙覧歌集解説』土岐善麿校註 朝日新聞社1950・6）

足立尚計も「この「独楽吟」は、曙覧がときどき楽しみと思うことをまるで独楽を回すように繰返しの沓冠形式で、詠み集めたものとみられる」というように同様の観点を持っている。（「松平春嶽と橋曙覧—松平春嶽の対人物観をめぐる一視座」『福井市立郷土歴史博物館研究紀要』第8号 2000・3）

また、前川幸雄・前川正名・水島直文の論文『橋曙覧作「日本建国之吟」考』（前掲）の中に、「橋川時雄博士の示教によれば、……五十二首からなる著名な連作「独楽吟」は、宋の邵雍の詩集『擊壤集』中の「独楽吟」を典拠としているとのことである。（水島直文聞書）」という指摘がある。

そしてまた、久保田啓一は「この型そのものではないが、発想のもととなった先例の一つに、「たのしみは春の桜に秋の月夫婦中よく三度くふめし」（万載狂歌集・雑上・花道つらね）があるではないかと推測する」と述べている。（『志濃夫廼舎歌集』久保田啓一校註 明治書院2007・4）

「たのしみは……」というような形の歌は、早く『他阿上人集』の中に、次ぎのような二首が見られる。（括弧内の歌番号は『新編国歌大観』による。以下は同じ。）

嘉元三年、白幡の道場にて、別時勤行の時読める（その八）

楽しみはなげき思ひとなりにはり歎きの時はあらまほしくて（33）

すなはち食時になりぬれば

たのしみはもとの心に立帰り物くふわざもありとこそきけ（503）

さて、以上のように、「独楽吟」の表現形式についての先行研究の指摘は、「和」的な角度からのものが多く見られる。これに対して発表者は、和漢という二つの角度から検証すると、一層有効であるのではないかと思ひ、前川幸雄他の論文に、曙覧の「独楽吟」は、宋の邵雍の詩集『伊川擊壤集』中の「独楽

吟」を典拠としているという指摘に特に注目した。

しかしながら、四部叢刊本および和刻本などの版本の『伊川擊壤集』の中を調べたところ、「独楽吟」という作品は見当たらなかった。その一方、「首尾吟」という一群の連作詩があることがわかった。

この「首尾吟」は、一百三十五の連作であり、各首詩の初句と末句は「堯夫非是愛吟詩」（堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず）という同じ句で統一されている。このような形式は曙覧の「独楽吟」と相似していると考え、ここでは、「首尾吟」の形式について検討したい。

二、「首尾吟」及びそれと「独楽吟」との比較

「首尾吟」とは邵雍の詩集『伊川擊壤集』に収められる一百三十五首の連作詩である。

邵雍は字を堯夫、諡を康節という。北宋真宗の大中祥符四年（1011）衡漳（河南省北部）に生まれ、神宗の熙寧十年（1077）、六十七歳を以て、洛陽でなくなった。宋学の先駆の一人とされ、先天易学を以て知られる。著書には『皇極經世書』（観物内篇・同外篇）『漁樵問対』『伊川擊壤集』『無名公伝』がある。

『伊川擊壤集』は邵雍の詩集である。自序の日付により、英宗の治平三年（1066）、邵雍五十六歳の時の自選になる。詩千五百首を載せ、巻数には二十巻本、六巻本、十巻本がある。

「首尾吟」について、明の徐師曾撰『文體明辯』附録卷一の中に、「雑体詩」という項目の下に「首尾吟体」と分類され、「首尾吟者一句而首尾皆用之也此体他集不載唯宋邵雍有之」（首尾吟は一句にして首尾みな之れをもちゆ、此体他集に載せず、唯宋の邵雍之れ有り）と記載されている。

例をあげてみると、次のようなものである。

堯夫非是愛吟詩、安樂窩中坐看時
一氣旋回無少息、兩儀覆燾未嘗私

四時更革互為主、百物新陳争効奇
享了許多家樂事、堯夫非是愛吟詩

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、安樂窩中坐して看の時
一氣旋回して少^{しば}らくも息^{いこ}ふなく、兩儀覆^{ふとう}燾して未だ嘗て私あらず
四時更革 互に主となり、百物新陳 争つて奇^{もら}を効はす
享了^{あまた}す許多の家の樂事、堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず
(書き下しは中国古典新書／『伊川擊壤集』上野日出刀著 明德出版社
1979・6に拠った。ただし一部表現を改めた。以下同じ)

例のように、「首尾吟」各首の詩の初句と末句は「堯夫非是愛吟詩」(堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず)という同じ句で統一されている。そしてまた一つ、「首尾吟」の全体において、各首の首聯は、初句は「堯夫非是愛吟詩」(堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず)という句で、第二句は「……時」(……時に)という詞で統一されて、これを百三十五首も並べて、リズムを形成している。このような形式は曙覧の「独楽吟」と非常に似ている。

そしてまた、作品の内容においては、両者はどのような関係にあるのだろうか。

「堯夫非是愛吟詩」(堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず)とは、詩は興に乗じて自然にできるものであり、詩作を愛するがために、苦心して作りあげたものではないとの意味である。そして、『伊川擊壤集』序の冒頭に、「擊壤集伊川翁自樂之詩也。非唯自樂、又能樂時與万物之自得也」(擊壤集は、伊川翁自ら楽しむの詩なり。唯だ自ら楽しむのみにあらず、また能く時と万物の自得とを楽しむなり)と邵雍が自ら記したように、詩・書・家族・友人・田園・山水などに楽しみを得て、そこで興に乗じて詩を詠みあげたという表現内容は「首尾吟」の主体になっている。これと曙覧の「独楽吟」とを比較してみれば、非常に一致しているように思われる。

「独楽吟」の中には、「首尾吟」により構想を促されたとみられるもの、特に「首尾吟」の初句と第二句の趣向をとりなしたとみられる例が散見される。それを整理してみると、次のように六項目に分けられる。(詩の番号は『伊川擊壤集』中の「首尾吟」各首に仮に付したものである。なお、「首尾吟」各首は首聯のみ、または一首の関連のある部分に傍線を引いて掲げる)

1 同じく静思・瞑想の境に入った時に感じた楽しみを詠む場合、

「独楽吟」

たのしみは艸のいほりの莛敷きひとりころを静めをるとき (553)

たのしみは心にうかぶはかなごと思ひつづけて煙艸すふとき (562)

「首尾吟」

堯夫非是愛吟詩、安楽窩中坐看時 (2)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、安楽窩中坐して看る時

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫黙坐時 (42)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 黙坐の時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫注思時 (91)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 注思の時

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫楽静時 (117)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 静を楽しむ時に

2 同じく学問に感じた楽しみを詠む場合、

「独楽吟」

たのしみは珍しき書人にかり始め一ひらひろげたる時 (555)

たのしみは紙をひろげてとる筆の思ひの外に能くかけし時 (556)

たのしみは百日ひねれど成らぬ歌のふとおもしろく出できぬる時 (557)

たのしみはわらは墨するかたはらに筆の運びを思ひをる時 (594)

たのしみは好き筆をえて先水にひたしねぶりにて試るとき (595)

「首尾吟」

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫筆逸時 (19)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 筆逸する時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫試硯時 (21)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 硯を試す時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫試筆時 (22)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 試筆する時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫試墨時 (23)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 墨を試す時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫掩卷時 (45)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 卷を掩う時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫擲筆時 (102)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 筆を擲げる時に

3 同じく自然に感じた楽しみを詠む場合

「独楽吟」

たのしみは空暖かにうち晴れし春秋の日に出でありく時 (560)

たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲ける見る時 (561)

たのしみは意にかなふ山水のあたりしづかに見てありくとき (563)

たのしみは常に見なれぬ鳥の来て軒遠からぬ樹に鳴きしとき (565)

「首尾吟」

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫春出時 (44)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 春に出る時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫入夏時 (45)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 夏に入る時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫秋出時 (46)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 秋に出る時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫春尽時 (61)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 春尽きる時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫信脚時 (85)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 脚を信せる時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫出入時 (96)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 出入りする時に

4 同じく日常生活に感じた楽しみを詠む場合

「独楽吟」

たのしみはすびつのもとにうち倒れゆすり起すも知らで寝し時 (554)

たのしみは昼寝せしに庭ぬらしふりたる雨をさめてし時 (577)

たのしみは人も訪ひこず事もなく心をいれて書を見る時 (585)

「首尾吟」

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫談笑時 (38)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 談笑する時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫睡覺時 (90)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 睡る時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫晩歩時 (98)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 晩に歩く時に

5 同じく生活に困窮した時に感じた楽しみを詠む場合

「独楽吟」

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふとき (566)

たのしみは銭なくなりてわびをるに人の来りて銭くれし時 (574)

「首尾吟」

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫処困時 (99)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 困に処する時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫処否時 (100)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 否に処する時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫無奈時 (101)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫無奈の時に

6 同じく家庭・田園に感じた楽しみを詠む場合

「独楽吟」

たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時 (558)

たのしみはまれに魚煮て児等皆がうましようましといひて食ふ時 (569)

たのしみは家内五人五たりが風だにひかでありあへる時 (582)

たのしみは機おりたてて新しきころもを縫ひて妻が着する時 (583)

たのしみは三人の子どもすすくと大きくなれる姿みる時 (584)

たのしみは田づらに行きしわらは等が耒耜とりて帰りくる時 (592)

「首尾吟」

堯夫非是愛吟詩、詩是閑観蔬圃時 (63)

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ閑そぞろに蔬圃そほを観る時に

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫自足時 (66)

開口笑多無若我、同心言少更為誰

田園管勾憑諸子、樽俎安排仰老妻

不信人間有憂事、堯夫非是愛吟詩

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 自ら足る時に

口を開きて笑うこと多き 我に若(し)くはなし、心を同じくして言うこと

と少き 更に誰とかなす

田園かんこうの管勾よは 諸子そんぞに憑り、樽俎あんばいの安排は 老妻に仰ぐ

信ぜず 人間 憂事あることを、堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず

堯夫非是愛吟詩、詩是堯夫詔老時 (116)

金玉過從旧朋友、糟糠欲喜老夫妻

瓦焼酒盞連酷飲、紙画棋盤就地囲

六十六年無事客、堯夫非是愛吟詩

堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず、詩はこれ堯夫 老ほこに詔る時に

金玉 過從す 旧朋友、糟糠 欲喜す 老夫妻

瓦焼の酒盞さん 酷はいを連ねて飲み、紙画の棋盤 地に就きて囲む

六十六年 無事の客、堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず

このように、静思・瞑想の楽、学問の楽、自然の楽、日常生活の楽、家庭・

田園の楽及び困苦の境の楽という人生の楽しみを、第一人称の角度から物語るという連作の叙事性と、実情を重んじる写生的な手法からは、「首尾吟」と「独楽吟」の今ひとつの共通点がうかがえる。

まとめ

曙覧の代表作とされる「独楽吟」は、独特な表現形式を以て、各名家に賞賛され、そして倣って詠じられた。その影響力は幕末・明治時代から現代まで続いている。そこに、「独楽吟」の表現形式の芸術性が十分にうかがえる。

このような表現形式の形成について、先行研究では、「くつかむり」の方式などが作者の発想と構成を促した、または狂歌などの影響があるというように指摘されている。ほかにも、『源順集』中の「世の中を何にたとへん」や『山家集』中の「山深み」などの連作詠から影響を受けているという指摘はあるが、いずれも「和」的な角度からのものである。これに対して発表者は、和漢という二つの角度から検証すると、一層有効なのではないかと思ひ、「首尾吟」に着目して、それと「独楽吟」との関係について検討した。

まず、表現の形式においては、「首尾吟」各首の首聯が「堯夫非是愛吟詩」（堯夫はこれ詩を吟ずるを愛するにあらず）、「……時」（……時に）というように統一される形が「独楽吟」と非常に似ている。そして、表現の内容においては、詩・書・家族・友人・田園・山水などから得た楽しみを詠みあげているという「首尾吟」の主要内容が、「独楽吟」と一致することがわかる。また、第一人称の角度から物語るという連作の叙事性と、実情を重んじる写生的な手法からは、「首尾吟」と「独楽吟」の共通点がうかがえる。したがって、「独楽吟」の表現形式が形成される中には、「首尾吟」からの影響が存在する蓋然性が非常に高いと考えられる。

なお、今回の発表では、諸先生方に貴重なご意見やご助言をいただいた。その中には、「首尾吟」各首の排列と全体的構造についての解説、分析が欠けていること、「首尾吟」と「独楽吟」両者の具体的な受容や撰取の例をあげること、

近世後期における「首尾吟」の受容状況についての考察が必要であることなどの、大切なお指摘があった。このことを含め、「独楽吟」と「首尾吟」の関係についてさらなる細密な考察をこれからの課題にしたい。

[注]

- ①『歌論 選歌』（『子規全集』第七巻）講談社 昭和50年7月18日第一刷発行
- ②『斎藤茂吉全集』第十一巻 岩波書店 昭和49年9月13日発行
- ③釈迢空著『曙覧の研究』東京高遠書房刊 昭和9年1月10日発行

* 討議要旨

ロバート・キャンベル氏は、①レジュメに引用している水島直文論の出典はなにか、②「独楽吟」と比較参照している古詩「首尾吟」の全体の流れはどのようなものか、と質問し、発表者は、①「水島直文聞書」からの引用である、②邵雍が日常の事物から感じたままを吟じ自然に並べた印象が強く、意図的な編集構成は感じられない。また詩の背景には易学からの影響がみられるようだ、と回答した。それに対してキャンベル氏は、②「首尾吟」の原詩そのものを資料として併せて提示した方が理解しやすい、と助言した。

武井協三氏は、レジュメにある「たのしみは春の桜に秋の月夫婦中よく三度くふめし」は五代目団十郎の作だが、こうした形式の歌は『万載狂歌集』以前から作られていたのか、と発表者および会場に問い、大高洋司氏が、それ以前に「たのしみは夕顔のさける軒ばの下涼み……」という歌がある。詳細はわからないが古くから踏襲されてきた形なのではないか、と答え、さらにロバート・キャンベル氏が、「それは木下長嘯子の歌だ」と補足した。